



TITLE:

# 昭和62年度 附属図書館の利用概要

AUTHOR(S):

---

CITATION:

昭和62年度 附属図書館の利用概要. 静脩 1988, 25(1): 13-15

ISSUE DATE:

1988-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37012>

RIGHT:

## 昭和62年度 附属図書館の利用概要

附属図書館は、新館の開館（59年4月）から去る3月末をもって4年を経過した。この4年間は、新館の多方面に亘る計画と新機軸の基礎作りの時期であった。幸いにも学内外の方々のご理解とご支援を得て着実な歩みをたどって来た。附属図書館がどのように利用されているか、62年度の概要を紹介し、今後のサービスの在り方を検討するためのデータとして活用していきたい。

なお、視聴覚資料については、本号12頁に掲載したので、ご覧願いたい。

### 1. 入館者：

年間 267 日開館し、608,882人、1日平均2,280人が入館した。特に2月2日には4000人の入館者数を記録した。月別では2月が最も多く66,872人（1日平均3,040人）であった。

時間帯では開館時間9～21時のうち、昼間（9～17時）が全体の83%を、特に12時から15時までの3時間に1日の39%の入館者が集中している。

入館者数の月別変動は、大学の行事等の季節要因による流れがあり、特に2月の試験期は閲覧席が確保出来ない日もあった。

（注）この数字は、利用証によってカウントされた人数で、他に十数%の入館者がある。

### 2. 図書の貸出

開架図書と書庫内図書との貸出冊数比は83：17となっており、合せて76,991冊が40,866人に対して貸出された。

部局別では文学部が最多冊数（19,260）で貸出密度（貸出冊数÷登録者数）においても10.3冊と他学部よりも群を抜いて多かった。

開架、書庫内図書の貸出、雑誌、参考図書の一時的貸出及び貴重書の閲覧総数は120,412冊であった。

#### (1) 開架図書

開架図書（約55,000冊）の配架状況は、言語・文学分野が全体の16.3%、次いで法学・政治と歴史・地理が各11%となっている。

貸出冊数は63,703冊で、これを分類別に見ると、数学・物理が25.1%と他分野に比して圧倒的に多く、回転率においても同分野の図書は1冊当たり年間約3回貸出された。

身分別では学部学生が81%を占めている。

#### (2) 書庫内図書

13,284冊が貸出され、院生が37%と最も多く、次いで学部学生、教官の順で、一人当たり貸出冊数では教官が最も多い。

分類別では、人文・社会科学分野が圧倒的に多く、①言語・文学、②歴史・地理、③宗教・哲学の順に多く、開架図書と大きな差異がある。

### 3. 参考調査

#### (1) 文献調査

所蔵調査の受付（文書、電話）

4313件（内訳：文書1,781、電話2,532）

文書による調査依頼の殆どは大学図書館間の相互利用によるものである。電話では学外から4割の調査依頼を受けている。

#### (2) 情報検索（JOIS, DIALOG）

校費による代行検索は、JOIS 19件、DIALOG 18件、計37件行い、データベースの検索回数は、190回であった。これは60年度の9件45回、61年度の18件51回からみて倍増の傾向にある。この他に学内システム（大型計算機センターシステム）の検索も行なっている。

### 4. 貴重書の閲覧

貴重書の閲覧で特徴的なことは、学外者の利用が過半数を占めていることである。利用者329人のうち、179人（54.4%）、冊数においても2,427冊のうち、1251冊（51.5%）が学外者によって占められている。附属図書館が重要文化財をはじめ多数の貴重書を有し、学外者にも有効に活用されていることの証左である。

資料の内容では、文庫になっていない単独の貴重書の閲覧が585冊（24%）で最も多く、次いで平松本（朝廷の儀式典礼の記録）が564冊（23%）、

第3位が谷村文庫（国文学，特に連歌，和歌の集書）340冊（14％）となっている。これら3位までで全体の61％を占めている。

5. 図書館間相互協力

(1) 他大学等への紹介状の発行

①国立大学共通閲覧証：185件

②公 私 立 大 学 等：391件

(2) 文献複写

①受 付：8,103件

②依 頼（国内）1,226件

（外国）160件

受付8,103件のうち778件（9.6％）が謝絶で，この大半は所蔵なし及び書誌事項記入の不備であった。機関別では国立大学から6,049件（74.4％），私立・公立大学1,473件（18.2％），個人・企業等465件，国立機関116件となっている。

また，本学からの依頼（国内）1,226件のうち，国立大学へ804件（65.6％），私立・公立大学へは422件行なった。

(3) 図書の現物貸借

所属機関にない資料の利用については，図書館間相互協力活動のうち，図書館資料そのものを貸し借りする，いわゆる現物貸借制度を活用している。本学においてもこの制度の運用により学内外に多くの研究に寄与している。

①他大学への貸出

受付総数	所 蔵		貸 出	
	有	無	可	不可
496件	485	11	355	141
100％	97.8	2.2	71.6	28.4

貸出不可141件の内訳は，所蔵図書室が貸出不可48％，長期貸出中16％等であった。

②他大学等からの借用

受付総数	所 蔵		借 用	
	有	無	可	不可
167件	162	5	128	39
100％	97.0	3.0	76.6	23.4

借用不可39件の内訳は，所蔵なしのほか，所蔵図書室が貸出不可16件（30％），国立国会図書館貸出制限資料12件（30％）等であった。

借用者を身分別に見ると，院生の利用が最も多く99人（59％），次いで助教授14人，学部学生と教授の利用が各11人あった。

6. 学外者の利用

附属図書館では従前から学外者の利用を図書館の創設以来，年に2回程行なっている一般公開の展示会をはじめ，資料の閲覧についても積極的に対応して来た。

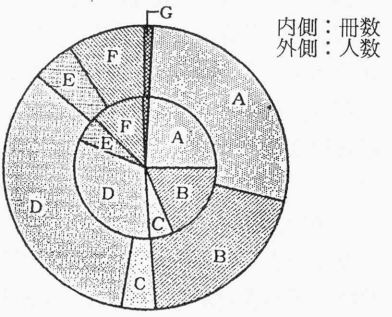
近時，社会の要請と国立大学図書館協議会での「大学図書館の公開」に関する全国的な取り組みに呼応し，附属図書館でも「京都大学附属図書館学外者利用内規」（昭和62年3月24日附属図書館長裁定）を定め，規程化された運用を開始した。

62年度に利用された資料は以下のとおりである。

	一 般 図 書	新 聞	参 考 図 書	貴 重 書	雑 誌	計
冊	3,466	526	159	1,251	2,578	7,980
比率	43.4％	6.6	2.0	15.7	32.3	100％

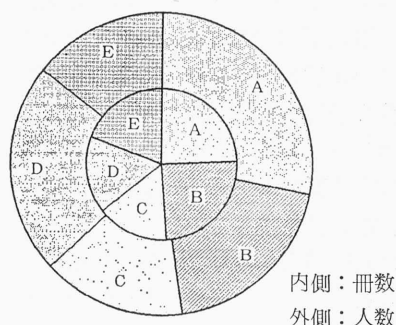
所属機関別内訳

所属機関等	人	％	冊	％
A 卒 業 生	499	28.0	1,940	24.3
B 国立大学	357	20.0	1,483	18.6
C 公立大学	70	3.9	430	5.4
D 私立大学	597	33.5	2,572	32.2
E 一般市民	88	4.9	471	5.9
F 機関・研究所	157	8.8	973	12.2
G 外国人	15	0.8	111	1.4
合 計	1,783		7,980	



身分別閲覧内訳

身 分	人	%	冊	%
A 卒 業 生	499	28.0	1,940	24.3
B 教 官	349	19.6	1,952	24.5
C 大学院生	274	15.4	1,227	15.4
D 学部学生	401	22.5	1,306	16.4
E そ の 他	260	14.6	1,555	19.5
合 計	1,783		7,980	



### 昭和63年度 調査研究員の委嘱

このたび、昭和63年度附属図書館調査研究室の調査研究員に下記三名の教官が委嘱されました。委嘱期間はいずれも昭和63年4月1日から昭和64年3月31日までです。

文 学 部                   ：日野龍夫教授  
調査研究事項：「大惣本」目録解題作成

大型計算機センター：星野 聡教授  
調査研究事項：目録カードによる遡及入力の研究

大型計算機センター：金沢正憲助教授  
調査研究事項：遡及入力標準フォーマットの設定

### 図書館の「課」名変更

附属図書館の「課」の名称が昭和63年4月8日付で変更になりました。これは学術情報システムの進展をはじめとして、時代の変化に即応した名称に変えようとするもので、95の国立大学図書館のうち、部課制を採用している26大学に同時に適用されるものです。

課名の変更は以下のとおりです。

〈前〉

○総 務 課           →   (変更なし)  
○整 理 課           →   情報管理課  
○閲 覧 課           →   情報サービス課  
学術情報課       →   情報システム課  
医学情報課       →   (変更なし)

(○印は京都大学の場合です)

〈新〉

### 「田中美知太郎文庫目録」の刊行

本学名誉教授故田中美知太郎博士の所蔵されていた洋書(2104部、2974冊)を、昌子夫人をはじめ御遺族の御好意により、文学部に御寄贈いただいた。文学部整理掛では、これら貴重な図書の整理を終え、このたび「CATALOGUE OF THE PROFESSOR MICHITARO TANAKA LIBRARY」(京都大学文学部「田中美知太郎文庫目録」として冊子体で刊行した。

田中美知太郎先生は、明治35年新潟でお生まれになり、大正15年京都帝国大

